

「承認の政治」の外部

——社会運動における自己承認の可能性——

京都大学大学院文学研究科 鈴木起生

1. 目的・方法

政治理論家チャールズ・テイラーの議論を筆頭に、「承認の政治」という考え方は、リベラルな多元主義論の要となってきた。承認の政治は支配的な社会認識や価値秩序に挑戦するさまざまな運動を、承認を求める運動として理解し包摂することで、既存の自由民主制秩序を更新していこうとする。これは決して政治理論上の思考実験ではなく、1960年代・70年代の諸運動に応答するなかであらわれ今日までつづく、実際の多元主義の政治を規定する思考の型といえる。本報告の目的は、1. 承認の政治という思考様式に内在する問題点を原理的に究明し、さらに2. 社会運動や運動に基礎をおく研究が提示する思考や論理に注目することで、承認の政治の枠組みを突き抜けていく別様の思考様式の可能性を示すことである。

本報告では上記2点の目的を、承認の政治を国策として進めてきたカナダを事例に探究する。カナダは代表的なリベラル多元主義論が現実に応答して生まれた地であり、理論と運動のリンクを問うための事例として適している。本報告ではまずカナダで承認の政治が登場してきた歴史的経緯を、とくに先住民運動との関連に焦点をあてて簡潔に確認する。そのうえで、承認の政治の思想を徹底的に批判したグレン・クルサードの画期的研究を参照し、彼の批判と同様の論点を提示している哲学者スタンリー・カヴェルの議論と対比させることで、クルサードの議論がもつ独創性を明らかにする。最後に彼の議論が導きうる問題を示し、それを実践的に解消しうるカナダ先住民運動のあり方を取り上げ、結論とする。

2. 結果・結論

先住民との関連でみたとき、カナダにおける承認の政治は1969年の *White Paper* に触発されて巻き起こった対抗運動に応じ、従来にあからさまな同化主義をあらためる新しい政治理念としてあらわれた。しかしクルサードが理論的・経験的に明示してみせたように、既存秩序とそこへ他者を同化させる政治を大きく転換させたかみえるこの政治理念は、先住民自らが定住植民地統治の社会秩序を再生産していく主体化の装置として機能してきた。こうした問題を原理的な形で鮮やかに表現したのがカヴェルの議論であり、それは一部の政治理論家たちが注目してきたように、承認の政治がすでに固定された承認の枠組みを変えないまま他者をその枠内へと押し込む作動をとらえるうえで、非常に有用である。

クルサードの議論はこうした問題の指摘に加え、先住民運動にみられる論理を、「自己承認」という別様の承認の可能性として提示した点が独創的である。彼は先住民が自身の物語を自ら紡ぐ実践を、誰かの手を借りない自己承認の思想としてとらえ、与えられた枠組みに依拠しない承認のあり方を示唆した。この自己承認の思想に対し報告者は、自己承認に基づく運動が他者を必要としないものとなることで、非先住民との関係構築の可能性を閉ざしてしまうのではないかという疑問を抱いた。しかし実際の運動からは、先住民の人々が確固とした自己の物語をもちつつも、非先住民に協同を呼びかける姿がみえてくる。

文献

- Coulthard, Glen Sean, 2014, *Red Skin, White Masks: Rejecting the Colonial Politics of Recognition*, Minneapolis; London: University of Minnesota Press.
- Owen, David, 1999, "Cultural Diversity and the Conversation of Justice: Reading Cavell on Political Voice and the Expression of Consent," *Political Theory*, 27(5): 579-96.
- Taylor, Charles, 1994, "The Politics of Recognition," Amy Gutmann ed., *Re-Examining the Politics of Recognition*, Don Mills, Ont.: Oxford University Press, 27-73.